

## 清末中国画報における西洋医学の発展

鄧 怡然

### はじめに

ヨーロッパに発祥する近代文明が人類の普遍的進歩として、アヘン戦争をきっかけに清末中国に押し寄せ、それらの激しい反発を伴う大規模な文化変容をもたらした変動である。19世紀後半からの西欧列強と清末中国との出会いは、西欧による武力征服、不平等条約、領土割譲、政清的抑圧、経済的略奪が強制された冷酷な歴史であったが、同時に「抵抗としての文化触変」の過程でもあった。その結果として「両者の反発と牽引、軋轢と融合」という史上未曾有の様相を呈したのである。こういう「文化触変」の過程が清末中国に誕生した画報の中では深刻に反映されていた。

清末時代において、西洋の科学技術文化の中国での伝播は、中国の経済、政治、文化、軍事等諸分野に対して、重要な影響を与えた。伝播学理論に基づく科学技術文化の伝播に関する研究は、伝播者、伝播の内容、伝播の経路、伝播の効果及伝播の過程等の面が含まれる。清末時代における西洋科学技術文化の伝播は、その時代にしか見られない顕著な特徴を見せており、とりわけ、清末画報という特別な伝播者において、独特で多元的な特性を見せている。

こうした状況を受け、本研究は清末時代における西洋医学の伝播について、伝播者—清末中国の画報にのみ焦点を当てて考察する。西洋医学の伝播活動において、画報は伝播活動の担い手であり、伝播の内容の選択者、あるいは、科学技術文化成果の提供者である。本文は清末創刊された、各段階の代表的な画報を核に据えながら、東西文化接触のはざまに生きた上海の民衆の「中西（中国と西洋）文化観」と異文化受容を、当時の歴史背景と変化的状況に置いて考察したい。そして、具体的に西学東漸の背景における近代中国民衆達が西洋医学の認識の転変過程を目指す集まり、画報の考察することにより、清末上海の社会生活の近代化の概貌を描いておきたいながら、中国の近代化への軌跡を探ろうとした。

### 第一節 西洋医学伝播の背景

清末中国の西洋医学の伝播は布教事業と密接な関係がある。近代西洋の宗教は不平等条約の保護のもとで清末中国に入ったが、戦争に傷つけられた中国の民衆にこの異文化を心から受け入れたことが容易ではなかった。このような背景の下で、布教のため、病気を治して人を救うことは中国民衆を征服した重要な手段の一つであった。それで、アヘン戦争にかけて、中国における5つ町の開港に従い、たくさんの西洋病院が設立され、生理学、解剖学など西洋医学に関する訳書も大規模に出版された。訳書以外、19世紀後半宣教師が出版した新聞、雑誌も西洋

医学の伝播に役立った。『絲路華夏医学辨析』によると、外国宣教師が編集した医学雑誌といえ、1872年北京京都医院が編集した『中西聞見録』（後で『格致彙編』へ改名）、1880年の『西医新報』、1887年の『益文月刊』など数えられる。確かに『中西聞見録』の創刊号に「医学論」という文章がある。傅蘭雅などが訳した『儒門医学』という本を紹介した。1891年『格致彙編』夏刊から連載する「医理略論」は系統的に医学知識を紹介した。画報を見ると、1877年『小孩月報』第3巻第1期から連載した博恆理（Henry Dwight Porter, 1845-1916）が書いた『省身指掌』こそはすでに系統的に医学知識を紹介し始まった。『点石齋画報』は清末中国の様々な西洋病院に関する記事および具体的な医療ケースをたくさん掲載していた。20世紀入ってから、『図画日報』も「上海の建築」の欄目で「同仁医館」「婦孺医院」「仁济医院」などの詳しい紹介した。

## 第二節 医療施設

清末中国の西方医学の伝来と言え、宣教師や教会は大きな貢献をした。彼たちは早い時点で中国都市の公衆衛生状況の悪さと伝染病の流行に関心を持ってくれた。中国に入ったばかりの宣教師にとっては、解決しなければならない問題が人々の各種類の病気が、厳しかった生存環境の中で有効的な治療を得られなかったことである。従って、より衛生的な治療を受けられるために、独立した医療空間を確立しなければならない。これは直接に多くの西洋病院の創立を促進した。1876年にキリスト教が中国で創設した教会病院は16か所、診療所は24か所であり、1905年にこの数字が166か所、241か所に達した。<sup>1</sup>以下の表1に『小孩月報』、『点石齋画報』と『図画日報』の中で医療施設についての記事をまとめた。

	『小孩月報』	『点石齋画報』	『図画日報』
西洋病院	第28冊：同仁医館  第33冊：厦門近事 西医院	施医院（北京）： 西医治病（庚）；医院被竊（乙）  仁济医院： 挑痧笑柄（庚）；惡鴉遭殃（酉）；沉冤待雪（亥）；礮隊鉅災（亨）  同仁医院： 著手成春（己）；頭上生頭（书）；嚙勢奇聞（信） 婦孺医院：割割怪胎（文） 博济医院（蘇州）：剖腹出兒（竹）	上海医院（第1冊） 仁济医院：雉妓院之奇聞 第46號；上海之建築-仁濟醫院 第63號；少女不端之惡結果 第118號；匪徒攔劫行人 第165號；鎚水傷頭 第360號 婦孺医院（上海之建築 第2冊） 時疫医院（第2冊） 広仁医院（第2冊） 同仁医院：第103號 上海之建築-同仁医院 大風傷人彙誌 第109號

<sup>1</sup> 李伝斌，「晚清中国人西医觀の演变」，『光明日報』，2005年。

		総計:44 コマ	修槍肇禍 第 156 号
他の 医療 機関		診療所：飢民戴德（丁） 牛痘局：誠求保赤（丙） 紅十字会：奇園読書（忠）； 痲瘰在抱（御）	中法大薬房（第 1 冊） 謝錦齡牙医広告（第 1 冊）
医療 器械		顕微鏡：医局成災（庚）；妙画通 神（元）； エックス線：宝鏡新奇（利）	顕微鏡：第 18 冊 エックス線：透骨光治誦用 （第 1 冊）

表 1 医療施設の関連記事

清末中国画報の芽生える時期に西洋病院に関する記事が多くない。『小孩月報』第 29 号に「同仁医館」を言及した。「此圖乃礼拜堂新建于三廳溝者，在江湾北，距十有八里，乃監督会吳宏玉牧師，同中西会友数十人共襄建立，初是處某至外虹口同仁医館就診，而寓于是館，館中傳道者，勸之以福音真理，既聆之余，得聖靈默感而信之。病愈返里，中心受道，获益良多。推己及人之思，勃然興起。故請吳牧師余是處講道施医，孜孜不倦…」。また、第 33 号の「厦門近事」は厦門のある婦人が西洋病院で治療を受けることを描写していた。「距厦門約百里有跛婦，以是症而崇佛藥物療医，所費甚巨，跛仍未愈，聞厦門有西医素稱國手，意欲救治，而亲友阻之曰，汝之該西医處，必不汝留。跛婦曰，因是症而崇佛藥医，所費已巨，未获少愈，故决欲救治也。于是变賣衣衫，雜物，以作川資。既抵医院，見有宣道誦經者，是以借聞諸道，并所习贊美詩。亦复不鮮。考其所習，不第能背誦，且能觸類旁通，徹明奥义。或有以道究之者。應對合符，以表其玩索于道。而得聖靈之感也，明矣。人皆奇之，而今其跛少愈…」。

この二つの記事から見ると、近代早期の西洋医学の伝播が医療伝道の色彩が非常に濃かったことを判明できる。人間の身体と魂の両面に健康をもたらすために、人の尽力でできることをキリストの名において行い、その結果として、神聖で、神に受け入れられる生贄として、人が我が身を差し出すことができるようにすることが、医療伝道の高い目的である。医療伝道の訴えとは、要するに、キリストと使徒が癒しの奇跡を行われた理由のすべてが、今日教会が、その伝道において医療専門職の奉仕を得ていかなければならない重大な理由である、ということである。また、宣教師たちは、知識と技術においてかれらが有する近代西洋医学のゆえに、清末中国で歓迎された医療活動を行い、その活動を通してキリスト教や宣教師に対してもつ中国民衆の偏見や距離を小さくすることができた。

19 世紀 80 年代以降、教会病院の事業はさらに開拓された。そして新しい変化も現れた。まず、教会病院の創設は中国東南沿海で強化されたほか、日に日に内陸と北方に進展していた。東南沿海で蘇州博習医院（1882 年）上海西門婦孺医院（1884 年）、杭州広濟医院（1884 年）、汕頭益世医院（1885 年）、福音医院（1885 年）などを創設された。北方地域は天津婦孺医院（1882 年）、北京同仁医院（1886 年）、北京盛京施医院（1883 年）などである。中国の医療事業は

これから臨時の性質から長期の性質に向かっていた。<sup>2</sup>従って、画報の中で西洋病院についての記事は多くなった。『点石齋画報』は西洋病院についての記事は総計 44 コマである。特に「仁濟醫院」「同仁醫院」「施醫院」（北京同仁醫院）がよく言及された。同一、『図画日報』の中では西洋病院に関する図像や記事が約 12 箇所であり、すなわち「上海の建築」のコラムで「仁濟醫院」「同仁醫院」「婦孺醫院」を設立した経緯、一般病気の治療費用および病院の医療システムなどのを詳しく記載した。『図画日報』第 63 号「仁濟醫院」の中で「凡滬上居民一切受傷猝病諸事。悉送往該醫院診治」という言葉がある。<sup>3</sup>上海の住民が怪我や病気などの場合があったら、すべてこの病院で治療を受けられたことによると当時の上海の民衆が西洋病院に行ったことは珍しいことではないと考えられる。つまり、こういう時期から中国の民衆が治療を受ける手段、さらに医療上の社会生活形態を変わり始めた。

さらに、この時期で婦人や子供向けの専門病院の姿も観察できる。1896 年 1 月 10 日の『点石齋画報』は「割剖怪胎」という記事がある<sup>4</sup>。この報道にはある産婦が難産のため家族に「西門外の病院」（同仁女醫院）に運ばれて治療を求めたというニュースが載っていた。ここで言及された「西門外の病院」（同仁女醫院）は 1884 年 6 月 3 日アメリカ女性宣教師に創設された上海西門婦孺醫院というものであった。『図画日報』の中でこの病院の詳細が記載した。

### 上海之建築

#### 婦孺醫院（青）

西人於慈善事業。不惜以割股心之。行活人之事。慘淡經營。不避艱險。仁心仁術。吾於婦孺醫院而額手稱頌焉。夫人生不幸作女子身。更不幸而至於病。既病焉。又不能與男医直道

<sup>2</sup> 湯清、『中国基督教百年史』、589 頁。

<sup>3</sup> 『図画日報』「仁濟醫院」の原文：滬瀆人烟稠密。衛生匪易。苟醫無院以拯治之。何以鍼膏盲而起沉痾乎。邇來中西人士以割股之心。行慈善之業。創設醫院。日見其多。嘉惠閭閻。莫大於此。茲先將發起最早之仁濟醫院繪成此圖。爲租界之抱病者告。按仁濟醫院。在上海英界山東路麥家圈六號。二層洋房。大門內有大廳一間。爲居民候症之所。內爲病室。分上中下三等。凡中國人之無力延醫者。均往是院診治。院中延聘識西醫理之華人張汝舟。及洋醫福惠波二人。施治內外傷損諸科。常診掛號錢十文。不另取資。出診銀十兩。貧病不計。上等病房每日取資洋五角。中等免費。惟日收飯金一百五十文。凡滬上居民一切受傷猝病諸事。悉送往該醫院診治。誠善舉也。

<sup>4</sup> 『点石齋画報』文集「割剖怪胎」原文：本地人張云彪向操淮南王術，住南市，臨碼頭。娶妻某氏年已三九，迺來珠胎暗結，將近臨盆，肚腹膨脹，如五石瓠。前日忽覺腹痛，張邀收生婆至家伺應，不料孩至產門進退兩難，甚爲棘手，該收生婆以無能爲力而去。張驚慌失措，不得已至西門外國醫院求救，医生亦無法可施，只得用刀將孩兒頭割落，囑其抬回。張見事不佳，復送至同仁女醫院求治。經女醫生驗得，如欲取出孩胎，非將肚腹剖開不可。張至此無法可施，惟有唯唯從命。女醫生乃先敷以麻藥，繼而用刀將肚剖開，孩胎始出，視之已斃。但見四手四脚，手若兩人對抱者，除前割去一頭外，尚有一頭，惟身軀僅一耳。医將肚腹縫好，外敷丹藥，究以受創過深，氣虛而脫死于院，而死孩尚浸以藥，儲在割剝房內，以備博物院中考驗。人皆咄咄稱怪云。

其隱隱微。是天下至無告者也。當時滬北各醫院。於女科兒科未有專門。致全埠婦孺抱病者。受無窮之苦楚。而於難產一門爲尤甚。美國女醫生羅女士。惻然憫之。特發宏大願力。於教會中募集鉅資。創建醫院於西門外萬生橋南斜橋北首。購地數畝。建築紅磚高大洋房一所爲醫院。俗呼之曰紅房子。於光緒十一年（1885年）落成。開院診治。活人無算。迨光緒二十四年。重新建築。並擴充東南隅曠地數畝。冬間某日將竣工之際。忽不戒於火。各界救火會存畛域之見。悉不到場。任其延燒。全屋盡燬。二十五年春。爲修復燼餘之計。羅女士不惜犧牲一己之生命。於施診之餘。更募經費。夜以繼日。心力交瘁。及夏末新院方慶落成。並於院後添蓋病舍。是時就診者愈多。有難產者。女士親自奏力。剖腹取孩。母子賴以保全者。年有數起。技甚神矣。產婦入院。不拘何時。即深夜亦收留。產後月餘。始准出院。不取醫葯諸費。亦不問其來歷之若何。故近來上海無打胎墮胎傷命之事。其功德爲無涯矣。每日清晨十點開診。至下午五點止。不取醫葯各費。祇收掛號錢三十文。病房錢四等。上等日取資洋四元。中等二元。下等一元。最下等五角。極貧者不取資。有看護婦四十餘名。出外收生費。自五元至十元不等。記者與醫院爲鄰。故知之詳。日過其門而脫帽焉。敬其大造於吾桑梓也。

婦孺病院が開業以降、患者数は年々増加した傾向が見られる。一年目は4000人、翌年の患者数が概ね16135人を超えた。このような西洋医学の巨大な力に驚嘆せざるを得ない。<sup>5</sup>

また、病院以外の医療施設の記事が見られる。「誠求保赤」は上海英国租界で水痘局を創刊された事実を記載された。1872年12月3日の『申報』は「体仁医院施診」の報道がある。

「中外施医局院之多，莫盛乎上海。……茲珊記碼頭復設體仁医院，乃廣東之處女未嫁而盲，以致終身貞守，家則極富。臨終時，深恰病育之苦，遂將家資捐赴各處，設力（立）医院，延請西醫，專治目疾。今設體仁医院于上海，本為專治目病。因西醫深通医道，發願不論何項病症，一概診視，亦見夫西醫之贊襄善舉，體仁之道，名不虛傳。往治者，苟非重診，如仁濟之有習西法之中國醫生陳姓看治給藥；難治，則西醫親看。現在又添接漿種痘之舉，不特不取分文，貧戶尚仿道憲之牛痘局章，給予錢文。已奉工部諭，無力種痘，可往試焉。」これらの文献は、清朝末期の西洋医学が中国で種痘局を開設した史実を記録している、かつ当時の社会民衆が増加していた種痘の需要も反映していた。これは西洋医学が伝えられた後、一般民衆に対する医療知識の普及と切っても切れない関係である。

水痘を治療する医療機関を開設したほか、『点石斎画報』には西洋医学が戦時赤十字社を設立したという記録がある。1895年3月2日、画報は「痲瘵在抱」という新聞画を發表した。その論述は次のように書かれている。「西人素好仁義，其至中国行医傳教者，類皆視民如傷，救人救溺。而于兩國交兵么会，尤能尽也竭力，挺人困厄惟恐不及。近見中国盖州之戰，傷漢最

<sup>5</sup> 王莉娟，苏智良。「上海西口婦孺医院研究（1884—1952）」，近代史学刊，139 ページ，2012年。

多，威海之師，受創尤甚，特于营口、烟台兩處，設立紅十字會，邀集同志牧師并著名醫生，置備刀圭布帛，專醫華兵之受傷者。于是肢體不完、血污狼藉之流，巧吟痛楚，領旬而來，日約數百人。西醫有求必應，勞瘁不辭，無不各得安痊而去。惟慮經費不敷，函請上海教士慕惟廉先生廣為勸募，各善堂復為之協力籌捐，以襄義舉。噫，西人尤是人也，而樂善性成，且很慘域之見，而謂華人食毛踐土，素明大義者，反各解腰纏乎。施当其厄，此其時矣。」

以上の西洋医療施設の創立から分かったように、晩清西学東漸の大潮の中で、西洋医学は膨大な勢いで迅速かつ効果的に清朝末期の中国医療市場の重要な地位を占めていた。業務範囲が広い総合病院だけでなく、婦人と子供を対象とする専門病院があり、それと中国の負傷者を救援するボランティア団体赤十字会などの医療機関も創設した。これらは全部当時の中国の伝統的な医療体制に欠けていた部分である。要する、西洋医学医療機関の設立は清末中国の医療機関を完備しただけではなく、更に先進的な姿勢で清末中国の医療体制に大きな革命を起こった。

### 第三節 医療器械

医療器具は西洋医療活動に必要な要素の一つである。清末に入った西洋医師は中国に大量の医療機器を持ち込みした。

1897年12月29日『点石齋画報』の「宝鏡新奇」と題された記事は明確にエックス線が清末中国に伝来したことを掲載した。

自泰西格致之術精，而鏡之爲用大。千里鏡可以洞遠也。顯微鏡可以析芒也。豈惟是古鏡照人妍媸莫遁哉。不謂獄出愈奇，更有燭及幽隱者。蘇垣天賜莊博習醫院西醫生柏樂文，聞美國新出一種寶鏡，可以照人臟腑，因不惜千金購運至蘇。其鏡長尺許，形式長圓，一經鑑照，無論何人，心腹腎腸昭然若揭。蘇人少見多怪，趨而往觀者甚眾。該醫生自得此鏡，視人疾病即知患之所在，以藥投之，無不沉疴立起。以名醫而又得寶鏡，從此肺肝如見，藥石百靈，借彼光明同登人壽，其造福於三吳士庶者非淺。語云：欲善其事，先利其器。西醫精益求精，絕不師心自用，如此宜其技之進而益上也。<sup>6</sup>

蘇州博習病院の医師柏樂文（William Hector Park）はアメリカで新しく人の臓器を映すことの出来る魔法の鏡が作られたことを聞く、大金を惜しまずに購入し、それを蘇州まで搬入した。<sup>7</sup> その鏡で照らせば、如何なる人であろうと、臓器がはっきりと手に取るように見えるのである。彼は診療中にエックス線検査機を使用してからは、病気を診るにも、その病んでいる所在

<sup>6</sup> 「宝鏡新奇」『点石齋画報』（利集），広東人民出版社，1983年6月，21頁。

<sup>7</sup> 蘇州博習病院は1883年にアメリカの教会医師柏樂文と蘭華徳が創設したのである。1883年の『字林滬報』は以下の記事がある。「房屋之軒敞，器具之精良，規模之整肅，于西醫所設中亦当推為巨擘…」これによって、博習病院が当時の医療施設の中で最も良い病院であったことは言える。

を立ち上げどころにつかんで投薬が出来るようになり、重い病気も治らぬ者はいなくなった。まさに病気診断の正確率を高めたと同時に、医療措置の有効性も向上させた。記事の最後で絵師が「そのことに善くせんと欲せば、まずその器を利すべきである。西医は、絶えず進歩を求め、独りよがりにはならず、まさにかくのごとく、ますますその技の向上に努めているのである。」というように評価した。実は、「宝鏡新奇」を発表した1か月前に1897年11月の『時務報』と後の『格致新報』『図画日報』の中でもエックス線の報道や記事も考察できる。

『時務報』に「易格斯射光，愈用愈奇，兹有用此光以照鸡鸭，辨其能生蛋与否者。法国海関，現用易格斯光，照驗來往行李貨物，窺幽查隱，一覽靡遺。人皆以为不便，哗然拟請設法禁止。」を掲載された。<sup>8</sup>

『格致新報』：「第十八問 上海王廷魁 透骨電光何解」

答 自透骨電光創行以來考其性質者踵接肩隨英人特聚翰苑數十人聯成一會相與研究然尚未得其底蘊故名之日 X Ray X 算法中不知之記 Ray 光也大抵其光之遲速由於動數之多寡乃別一種能透物之電也

第二十問 嘉興錢嘉穀

去歲時務報中有曷格司射光鏡一節此光既能透衣照人膚體不知人如露體能否見其肺肝泥中之物能否照明如欲購須價若干在何處出售望一一賜覆

曷格司射光即係郎脫僅所創於第十八問已述一二此光不僅能透柔軟之體即堅凝如金石厚不過一二分者亦能透過故照人體無不見其肺肝但須於所照人物之後置白紙白布則能將其形象印於其上或置小照片則能將其片印出小照但不能在所照之物之前面看其內中情形故泥中之物不能照明英法美各國此器皆有出售近於美國報上見有告白云在美國紐及地方出售郎脫僅電光器具西文 Roentgen Ray Apparatus 茲寫西如下可托洋行家購致也至於價值未得其詳可向該行索價值單閱看也

Roentgen Ray Apparatus, etc, Elison Decorative and Miniature

Lamp Dept. (GGeneral Electric Co.) Harrison, New Jersey.<sup>9</sup>

『図画日報』：「透骨光治謊之妙用」<sup>10</sup>

謂余心有疾，懇先生用透骨電光。然余家貧力不能出五元之金。若先生以慈善為懷，乞免醫費，則感德彌深矣。醫生曰諾。婦又曰，余不喜解去衣衫，未知於查驗時有碍否。醫生曰是亦无妨，始發光照驗。瞥見婦人腰間袋內有二十元之金錢兩枚。蓋凡金類光綫不能透入故也。時婦人不知此光綫之能力。

<sup>8</sup> 時務報「曷格斯射光」。1897年11月第43、44冊。

<sup>9</sup> 『格致新報』1898年6月。

<sup>10</sup> 『図画日報』1909年第1冊。

以上の資料によると X 線検査機は医療器械であるほか、鶏や鴨が卵を生まれることを証明や荷物を検査する器具としても使用されたことが分かった。残念ながら、これらの多くの記事は当時の新聞編集者が実地調査をしていなかった状況下で主観的な想像を通して、誇張したでたらめな話である。しかし、以上の記事から X 線検査機の具体的な様子と機能については歪曲の疑いがあるが、当時の X 線検査機の応用範囲が広く、社会的な影響力があったことを垣間見える。

清末の画報で言及した西洋医学と一緒に清末中国に入った医療器械はまだ顕微鏡がある。『点石齋画報』1886年7月17日の報道「醫局成災」で「最可惜者、有一顕微鏡。大可数百倍、購時出價五百金、至此亦遭災劫云。」という記述があり、そしてここで記載された顕微鏡は中国に初めて伝来した生物を観察するための医用顕微鏡であるべきだと考えられる。一方、『点石齋画報』の「妙画通神」「輪舟作佩」「人面蜘蛛」「老眼無花」や『凶画日報』第4冊の「賣西洋景」と第8冊の記事には顕微鏡を論及されたが、ただ普通の拡大鏡として使われていたことである。

つまり、清末中国の西洋医学でエックス線機械や顕微鏡などの医療機器を使い始めたけど、これらの機器は価格が高すぎ、普及度や民衆達の認識度がそんなに高くなかった。しかし、こういう当時中国の西洋医学レベルを示した記事を見ると、当時の中国の西洋医療技術はかなりの先端を行っていたことが窺い知れるのである。また、これらの在中西洋宣教師や医師が「医療伝道」に心を尽くし、先進な外国の医療技術を中国で活かしていったことが今でも評価されていることを知ることができるのであろう。

#### 第四節 医療活動

元来医学は人間の日常生活の場における人間の病気の治療を究める事を目的としてきたから、西洋医学に於ては人間の社会の複雑さが次第につり集団における健康の必要性が要求されるに至って、疾病の予防、治療を中心に実地医学の技術が進歩した。一方伝統医学では専ら個人の健康を中心に医療が続いてきたように思われる。昔から今まで、医学は東西を問わず人間の文化として発展をとげてきた上、社会文明の中重要な部分である。中医学の輝かしい歴史を持っている土地で、清末中国に入った西洋医学は多数な挫折にめげず、ひいては中国民衆の健康のために不滅の貢献をしてきた。これについては清末中国の画報にも多くの記載が見受けられる。(表2)

表2 西洋医学の医療ケース

	『小孩月報』	『点石齋画報』	『凶画日報』
五官科		喉科新法(寅); 瞽目復明(匏); 削鼻求艶(礼)	一笔畫耳(第5冊) 一笔畫鼻(第5冊)
産婦人科		著手成春(乙); 剖腹出兒(竹); 剖剖怪胎(文)	



外科	驗病奇談（第39冊）	吞煙遇救（丙）；挑痧笑柄（庚）；收腸入腹（子）；西醫治疝（辰）；西國扁盧（未）；腹刀可吐（土）；借髮種髮（癸）；妙手割瘤（御）；剖腦療瘡（利）；鬮子遇救（書）	
難病		頭上生頭（書）；長臥奇聞（行）；醫疫奇效（忠）；別有肺腑（忠）；大氣盤旋（御）	
齒科		江湖妙技（石）	謝錦齡牙醫廣告（第1冊） 男女竟鑲金齒之時道（第2冊） 鑲牙齒（第5冊）
兒科		誠求保赤（丙）	

画報芽生える時期の『小孩月報』は系統的な理論知識から日常生活に注意すべき細かいところまで様々な連載や文章を掲載し、西洋医学の視点から子供が自分の体を大切にさせようと理念を伝えた。この中に連載する「省身指掌」は内容によって、4段にかけて述べた。第一段はタイトルがなく、食べ物が口に入ることから飲食及び消化に使える器官や臓器を順番に紹介した。第二段は「血脈運行」であり、心臓、血管、血行や血液の仕組みな

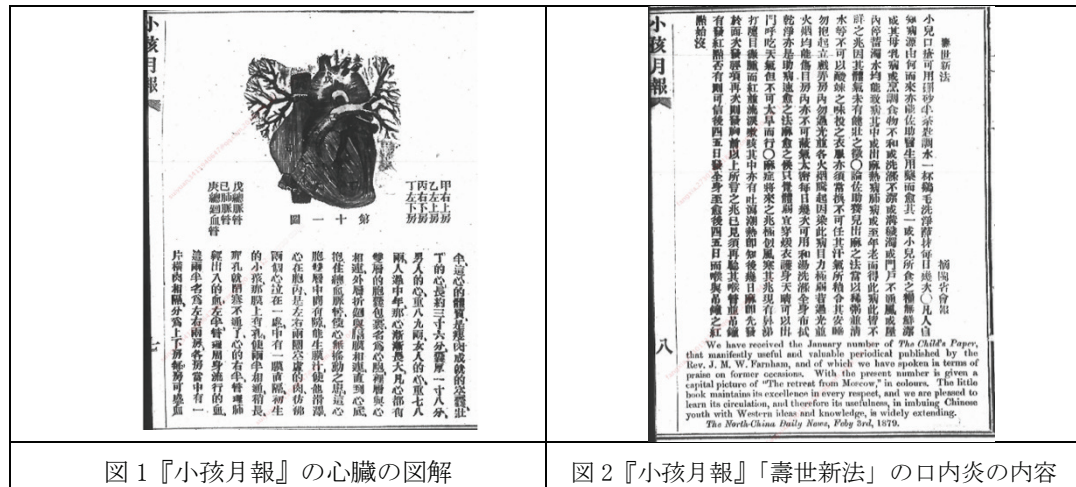


図1『小孩月報』の心臓の図解

図2『小孩月報』「壽世新法」の口内炎の内容

どを述べた。(図1) 第三段は「呼吸之理」であり、タイトルの通りに呼吸に関する人体構造、胸腔、肺、気管及び血気。第四段は「皮膚」に関して、皮膚と外界の接触、知覚及び入浴のことを論述した。理論知識を論述した上で健康管理方法も教えた。例えば、消化系統に関わる器官と臓器に巡っている第1段は歯、舌、胃、腸などの構造、効能及び消化の原理を述べる間、「吃飯時刻」「食物消化時刻」、「食物分際」のような健康的な飲食

に参考になる節が書れている。「省身指掌」の他、『小孩月報』は「保身良法」と「壽世新法」など健康にいい文章を掲載した。例を挙げると、第4巻第10期の「壽世新法」は子供の口内炎を直す方法、幼児の病気になりやすい悪い生活習慣及び子供の蕁麻疹の症状と治療方法を紹介した。後の文章も風邪や目の疲れなど一般的な病気の注意点と治療方法を述べた。(図2)

以上の医学知識を紹介したほか、『小孩月報』では唯一の西洋医学の外科手術案件を掲載した。原文は以下のように述べた。

#### 験病奇談

西医治病務審真确，然後奏刀不敢冒昧从事。此說是否余未敢決本館附議。西例凡有急病身死，不知其染病之由。宜送往医館憑医生剖腹考驗必得病源而後已。此種驗法中国誠為罕見，而西国已為常例也。昨申報載有粵人鄭某失業僑居虹口客棧，患病危篤。棧主恐其死於棧中…送医館奄奄一息勢將不起。西医訝其剖腹驗之。則腹中桑桑然皆紅頭黑身小蟲也。去蟲而洗以藥水撫之身尚未冰急以藥線縫合加法治之得不死。調理旬日而愈。死生由命，誠哉是言。

西洋医学の開腹術とは、手術方法の一つ。腹壁を切開し、腹腔を開放する手術方法のことである。しかし、上述したように「此種驗法中国誠為罕見，而西国已為常例也」、1870年代頃に西洋では当たり前のように行われていた開腹術が当時の中国ではこんなに普及が大きく遅れていた。しかも、このようにおこなわれた伝道医療であったが、伝道医師と地域社会との間には長きにわたって不信状態が続いていた。画報の中に示されたようにもともと病弱で難病により死亡に瀕したような中国民衆が、西洋医学の開腹術のお陰で無事に回復できたのことは、「死生由命」（人の死生を司るのは神様である。）と断じて、誤った治療を正当化し、治効を誇った。この記事が当時の中国民衆達に死生は天命にあたる観念と西洋文明の一つである西洋医学の衝突が表した。確かに、西洋医学は数千年の封建伝統文化が伝わってきた中で天命思想を中心とした中国民衆が素直に受け入れやすすくないであったと言えるだろう。

『点石齋画報』を誕生した以降、雑誌や画報の中で西洋医学の外科手術に関する事例が多くなってきた。開腹手術を利用した医療事例は子集の「收腸入腹」、未集の「西国扁卢」、御集の「妙手割瘤」などがある。さらに、この時期の西洋医学が多様な患者の病気、病態に適切な対応でき、豊富な知識と卓越した技術で臨機応変な対症療法を実施したことも多くの記載を証明できる。利集の「剖腦療瘡」は開頭手術の流れを紹介した。19世紀近代西洋医学になってからは、脳神経外科学は他の医学に回して著しく遅れをとっておりましたが、20世紀の始に至って脳神経外科学の基礎ができ上がったわけであり、益々発展進歩をとげている現状であった。画報の中には「醫生之技，不亦神乎」という賛美が書いてた。楽集の「借髮種髮」は他人の毛根を採取してその患者さんの頭部に毛穴を作って移植した植毛手術を記載した。誰にでもできる

手術ではないと言われるほど難易度が高く植毛手術の出現は西洋医学を高める努力を続けているからこそその結果であった。それと丙集の「吞煙遇救」は医師がガラス管を用いた、患者さんのお腹の雑物を水と一緒に引き出した洗腸の医療方法を説明した。この図像上の記述はこういうコメントがある。「得此西医者廣傳其法，俾度众生，則且以生佛奉之矣。孝廉何幸，乃遇此人。」<sup>11</sup>これによって、西洋医学が次第に当時の民衆達の信頼を得てきて、ひいては神仏と同じ位置を付けられたことを表した。ち並みに、1895年8月1日に刊行された『申報』の中で西洋医学の外科手術に対して以下のような論述がある。「虽手法之精，亦器具之妙；五官可補，四肢可接；腹患内開，肤裂可以綫补；真有奪造化之妙用。」この一人ひとりの患者に向き合う医療を主張した西洋医学の教えは、現代の医療に対しても大きな示唆を含んでいる。

また、眼科などは中国の伝統医療が不得手な分野であったため、これに関する治療は比較的受け入れられていたようであろう。1892年10月6日の『点石齋画報』には「瞽目复明」を掲載された。原文は「有郷人王玉山，素業手藝，雙目失明業已九年。一日至該館求治。經西医亞丹先生為之診治，曰：目珠似蓮子，一重又一重，共三十二重，今子目有翳，在第四重，宜用刀割之，藥水敷之，去其蔽障，則目自明矣；惟不可割至第五重，盖第五重系最要之樞，幸是处尚无緊耳。如法治之，旬余，目果复明。于是該處瞽人聞而求治者，趣趾相接，不知西医皆能療治，以弥天地之缺憾否耶」である。この記事はある西洋医師が患者のために白内障を摘出した手術を実施し、最後にこの患者の長年にわたった目の病気を治療したことにより、この医館も多くの患者を引きつけ選ばれた病院になれたことを述べた。最後にこの画報の作者さえも西洋医学が伝統的な医療が目の病気を治療することができない憾みを補ったことに感慨を禁じ得なかった。

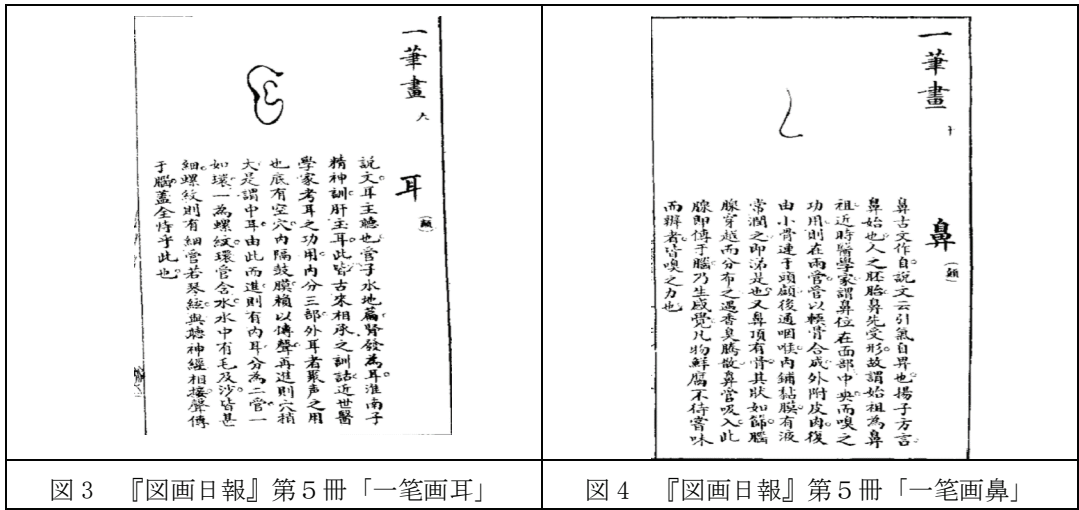
この時期の西洋医学が眼科以外の五官科はより一層発展を辿り着いた。『点石齋画報』（寅集）の「喉科新法」は西洋医学が喉の病気を治療したことが紹介した。<sup>12</sup>さらに、整形外科に関する記事まで出始まった。1893年に発表された「削鼻求艳」はあるアメリカ女性が自分の鼻の形に気に入らなかったため、医師さんをお願いして整形手術したからより美しくなったことを叙述した。<sup>13</sup>

20世紀初頭の中国社会においても一般市民が系統的な医学的知識を有するための手段や慣習はなかったから、「国民の智識増長」と「民間社会の風紀開通」を強調していた『図画日報』が医療知識を普及する責任の一端を担った。従って、「一笔畫耳」「一笔畫鼻」などの五官に関する医学知識の内容を見出された。（図3、図4）こちらの内容は耳や鼻の主要な構造、効能を紹介し、体の原理もはっきり説明した。

<sup>11</sup> 『点石齋画報』「吞煙遇救」，1885年4月1日。

<sup>12</sup> 『点石齋画報』「喉科新法」，1888年4月7日。

<sup>13</sup> 『点石齋画報』「削鼻求艳」，1893年5月6日。



それから、歯科が医科の一部として発達してきたことによると清末画報の中で口歯科についての記事がたまに見られる。『点石齋画報』の「江湖妙技」はある西洋医師が当時の民衆達が理解できなかった技術を用いて患者の歯を抜け出したことを記述した。<sup>14</sup>「美國人有名施瓜者，素精医学，名噪一時。其脱牙之術，無事用嵌；惟以藥一粒，閃鑲有光，如電火然，置人額上，而其所患之牙，自能脫落。因此求治者愈聚愈多。其術可為謂精矣。然跡其所為，頗類中國江湖賣解者流，不圖西國今亦有之。」これらの記述により、当時の民衆がアメリカの医者さんが沖を超えた技術を持っていたことを褒め上げたが、やはりただ世間で芸能を演じて生活を立ってる人々のような人間だと思ったことを考察できる。一方、これから多くの人が歯科の専門治療を受けられたことができるようになったことは清末中国における歯科医療の発展と歯科医師という職業が形づくられてきた道を開いた。

従って、20世紀入ったから専門的な歯科診療所の出現と入れ歯技術の発展などが話題にされたことは歯科医療が飛躍的な発展を遂げていたことを考えられる。そしてこの時期の『図画日報』などの画報では歯科に関する記事が増えていた。『図画日報』の第一冊に「謝錦齡牙医广告」を載せた。「夫人之牙齿抑有風火虫蛆缺陷參差以及老年落盡。顆粒無存遂至咀嚼甚為不便。故泰西医生精心研究巧奪天工。有專門鑲配嵌補接斷截長之法。近復精益求精。新待妙法。無脚亦可装配。盖本医生授業于泰西。倘有牙患。無不隱微洞徹。奧妙盡得。不論鑲配全口缺粒蛆齒嵌補，各盡其妙…」これによって、海外より外国人歯科医師が渡来し、中国に近代歯科医療が伝わった。それと中国から海外に学び、帰った後に中国で歯科診療所を開業した者が現れた。実は、中国で口腔保健および歯科疾患の予防に関する知識・技術の普及啓発に関し必要な事業を行ったことは「泰西」よりおよそ千年が早かった。なお、入れ歯の技術と近代の歯科医療の事業は近代に西方から伝わっていた。西洋医者が開設し献身的な診療活動の傍ら中国人歯

<sup>14</sup> 『点石齋画報』「江湖妙技」，1892年2月3日。

科医師の育成に努力を傾注し中国近代歯科医学の世界的発展の端緒を開く役割を担われた。清末中国の歯科医師という職業は西洋医師と当時の民衆の努力によって形づくられ、歯科医療の発展とともに公衆衛生活動を通じ社会に貢献する職業として確立されてた。『図画日報』に掲載された「男女競鑲金齒之時道」と「鑲牙齒」は中国人医師が歯科診療所を開設されたことを判明できた。（図5、図6）同時に、「鑲牙齒，真本事，外國學來好法子」（入れ歯の技術は素晴らしい、外国伝来されたいい方法である<sup>15</sup>）からも、当時の民衆が入れ歯治療への賞賛の態度が見られた。また、大衆に愛されていたからこそ、最初に僅か開設された歯科診療所は数年間で歯症病院まで発展した。

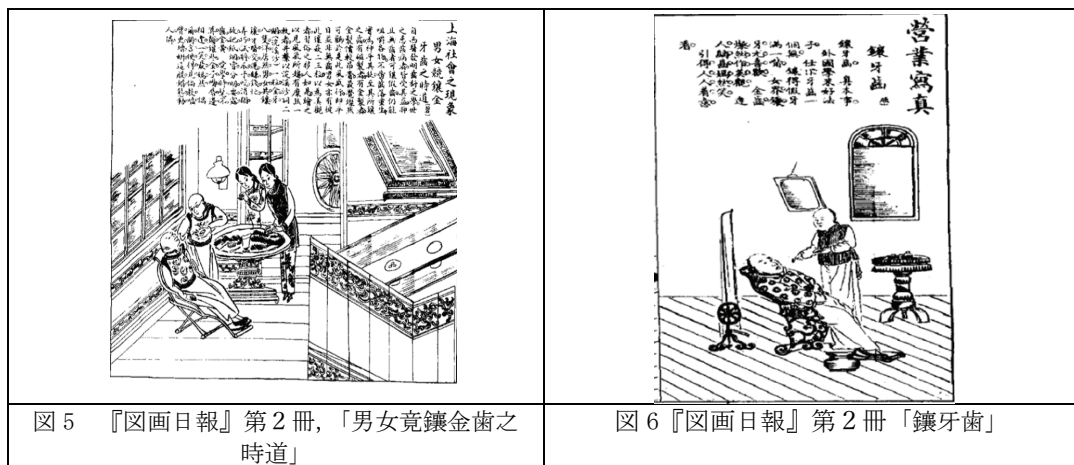


図5 『図画日報』第2冊，「男女競鑲金齒之時道」

図6 『図画日報』第2冊「鑲牙齒」

### 終わりに

以上の清末画報から纏められていた資料を示したように、長期にわたり鎖国してから、西洋文化に対して基本的な理解が不足している清末中国の民衆達は近代西洋医学の知識と技術を渴望していたながら、民族文化を自衛したかった感情が高まった。清末中国の人々に西洋医学への不信感を植え付けたことにより、最初に多くの荒唐無稽な発想や誤った西洋医学否定論があったからだ。確かに、清末中国における西洋医学という新型文明が創られた最初の過程においては、先人達は国の思惑と時代の流れの中で翻弄され相当な苦勞を背負わされてきたと推察できる。

そうした信頼関係へのこだわりの根底には医療そのものの不確実性というものがある。この不確実性には、三つくらいのレベルがあると思うんです。一つは、医学がまだ発達していないために起こる不確実性。二つめは、人間には非常に個体差が多いということ。個体差ということになると、これは科学的、画一的な法則性ではいかんともしがたい。そして三つめは、怠け

<sup>15</sup> 『図画日報』「鑲牙齒」の原文：「鑲牙齒，真本事，外國學來好法子。任尔牙齒一个無，鑲得假牙滿一嘴，女界鑲牙尤喜歡，金齒燦然做英觀。」

たりうっかりして、ということ。<sup>16</sup> こういう状況を踏まえ、西洋医学は衛生的な医療環境と最善の医療器具を提供したとともに、やはり真剣かつ厳格な態度と卓越した医療技術の進歩に目を奪われがちとなり、ますます多くの清末中国の民衆達に知られて信頼を得た。彼らは次第に西洋医学に対する偏見を変え、断固とした排斥や受け入れることを拒否し、逆に理解や吸収などのを試みったようになった。そしてより多くの開放的な都市で西洋医学を応用され、民衆の医療生活に確実な便利をもたらした。清末画報の関連記事が集中的に表現されていたように、古今東西の雑多な文化が交差、錯綜する喧騒の都であった上海ではすでに西洋医学の恩恵を受けられていたようであった。

---

<sup>16</sup> 中川米造, 加藤尚武「テクノロジーとしての医療」, 雑誌『現代思想』第14巻9号, 青土社, 1986年, 80-101頁。